

ハイサイ
沖縄

第二十六回

非戦・平和沖縄研修会 参加募集

テーマ 「沖縄戦後のあゆみ」

↳米軍統治下から今なお続く

沖縄の苦悩

— 開催趣旨 —

戦後八〇年の節目の年が過ぎましたが、沖縄では戦後も米軍統治下で事件が絶え間なく続きました。本年は戦後八一年となりますが、戦後沖縄で起きた事件はいずれもこれから「八〇年目」を迎えていきます。

二〇二五年に公開された映画『宝島』は戦後の米軍統治下の沖縄で起きた事件・事故の中で、米軍と日本に抑圧され続ける中で生きた人々の葛藤が描かれています。

米軍統治下であった一九四五年から一九七二年までの二七年間、数えきれない米軍による犯罪がありました。沖縄の日本復帰から二〇二二年までの約五〇年間で米軍関係者の犯罪は六、一〇九件のほり、うち凶悪犯は五八四件発生しています。そして二〇二五年現在、それは絶え間なく起こっており、日々、書類送検や有罪判決が報道されています。特に性犯罪の発生が顕著であり、二〇二四年七月、米兵による十六歳未満

の少女に対する拉致暴行事件を受け、沖縄別院では「米兵による女性への暴行事件に抗議します」との抗議声明を出しました。事件・事故が起こるたびに米軍は再発防止策などを約束しますが一向に改善される気配がなく、不信感をぬぐえません。

映画『宝島』の作中で、米軍の悪政と横暴に耐えきれなくなった者が、米軍に対して暴力に訴えようとするシーン。主人公の「そんなことしても変わらない」との呼びかけに「こうでもしなければ変わらない」と叫び返すあの葛藤は、今なおつづく沖縄の苦悩する心を表しているように思います。

今回は、戦後沖縄の歴史を学び、映画でも取り上げられている事件・事故の現場をフィールドワークします。

「日本を取り巻く安全保障の厳しさ」という一言で、日米の軍備が強化されて続けている沖縄で、浄土を抛り所として生きる者として歩みが問われてきます。本研修会を通して、沖縄の戦後の歴史から、一人ひとりがそれぞれに課題をいただき、歩みとなることを期して開催します。皆様のご参加お待ちしております。

日程 (案)

4月14日(火)	4月15日(水)	4月16日(木)
	集合	集合
	那覇セントラルホテル	各ホテルロビー
	8:00 出発	9:30 出発
	現地学習 予定	佐喜真美術館
13:30 受付	大浦湾・宮森小学校	
那覇セントラルホテル	12:30 昼食	12:00 沖縄別院(昼食)
14:00~	コザ騒動展示	
オリエンテーション	嘉手納基地	12:40 意見交換会
講義①野底文彬氏	18:00 那覇セントラルホテル着	閉会式
18:30~夕食・懇親会	解散	14:00 出発
20:30 解散		15:00 空港着

概要

期間 2026年4月14日(火)~16日(木)
会場 那覇セントラルホテル、沖縄本島各地
集合日時 2026年4月14日(火)午後1時半
講師 野添 文彬 氏(沖縄国際大学教授)
ガイド 沖縄平和ネットワーク予定
参加費 5,000円(※懇親会は希望者のみ別途6千円程度予定)
※往復旅費と宿泊費は全額自己負担となります。各自手配下さい。
募集人員 30名(定員に達し次第締め切ります)
申込方法 申込用紙に必要事項を記入の上、沖縄開教本部までお申し込み下さい。
申込締切 2026年4月6日(月)までに沖縄開教本部必着のこと。FAX可。
申込先 Email:okinawa@higashihonganji.or.jp FAX:098-890-2491
※詳しくはホームページをご覧ください。
※今回は辺野古ゲート前での座り込みは行いません。

【二〇二五年】

沖繩別院報恩講

十月二十四・二十五日、沖繩別院報恩講が勤修され、名古屋から荒山淳師をお迎えし、二日間にわたりご法話いただいた。

その中で、報恩講の五具足は左右対称となっており、すれ違い、繋がりをお忘れる私たちに、応答のある美しい浄土の世界が示されていると教えていただいた。また、雅楽は仏教とともに伝来したが、明治の廃仏毀釈の中で曲名が改められた歴史にも触れられた。

【県内米軍基地騒音激化】

沖縄県内の米軍施設では、普天間飛行場のある宜野湾市だけではなく、那覇市でも戦闘機による爆音が確認された。十一月四日〜七日にかけての飛来によるものだ。住民からは「子供が眠れない」「夜中に戦闘機の音がうるさい」「何度も上空を戦闘機が飛んでいる」などと、四日間で二九九件の苦情が寄せられた。十一月七日まで実地された即応訓練の一環とみられる。普天間飛行場と嘉手納基地に外来機のF35戦闘機の

二日目には「帰りなん、いざ」―私たちはどこへ行くというのか―を講題にお話いただき、中国の政治家であり文学者であった陶淵明の言葉を善導大師が仏法として伝えてくださった御心をお聞かせいただいた。

御門徒の皆さんと共に報恩講の意義を確かめる大切な機縁となった。二日間共に沖縄ではあまり耳にする機会のない龍笛と箏を演奏していただき、ユーモアを交えたご法話に笑顔の溢れる報恩講となった。

飛来が相次ぎ、県の騒音測定によると、100デシベル超えの騒音は九十三回発生し、最大は116.5デシベルだった。午後十時以降も100デシベル超えの騒音が確認されている。

宜野湾市の佐喜眞市長は十一月七日に、嘉手納町の沖縄防衛局と、那覇市の外務省沖縄事務局を訪れ抗議し、騒音規制法の順守と市民生活に最大限配慮するように求めた。また、村井勝防衛局長は、「米側に対して規制措置の順守をはじめ、周辺地域への影響を最



整然と駐機されるオスプレイ（普天間基地）

小限にとどめるよう働きかける」と応じた。



お斎の様子



雅楽楽器の演奏

イーソーグワチデーブル

まずは沖縄の言葉で新年のご挨拶いたしました。「よいお正月ですね」という意味です。沖縄の言葉は一方言にはとどまらない違いが沢山あります。近年は「琉球方言」ではなく「琉球諸語」または「しまくとぅば」と称し、独自の言語として大切にされています。とはいっても、琉球王国が併合されて以降、戦後まで続いた「方言撲滅運動」の影響で、二〇〇九年にはユネスコによって消滅の危機にある言語と認定されました。

そんな方言撲滅運動に対し、戦前、沖縄にやってきた民藝運動の提唱者である柳宗悦は大反対し、沖縄県と対立、果ては官憲の弾圧まで受けました。彼は言語や文化があつてこそ沖縄の様々な「美しいもの」が生まれるのだと思います。

その理解の根源には弥陀の四十八願の第四願「無有好醜の願」がありました。「分別以前」の一如の世界である浄土では、美しいとか醜いという評価ではなく、それぞれがそのままに輝いているということでしょう。その願いに立つならば、日本語を中心とした「美しい言葉」があるのではなく、それぞれの言葉そのままに、輝かしい魅力があるのです。

柳らが見出した「沖縄の美」を楽しみながら、浄土を抛り所として生きることを大切に、新しい年を迎えたいと思います。



「新年のあいさつ」

長谷 暢 沖繩別院 輪番